



ダーナビレッジで暮らす仲間たち。短期・長期で滞在する人や海外から訪れる方もいて、多い時には30人以上が滞在することもある

エコビレッジとは何か

「生きたい」と思える場所を取り戻す

小川美農里 (福島県西会津町・ダーナビレッジ主宰)

南インドで出会った新しい暮らし方

はじめまして。小川美農里と申します。私は福島県喜多^{きた}方市(旧山都町)の出身で、看護師として病院に勤めていました。大学時代には休学して世界約30カ国を旅した経験もあり、これまでに訪れた国は60カ国以上になります。

看護師2年目の2011年、東日本大震災と原発事故に遭遇し、被災地でのボランティア活動に関わる中で、病院という現場では、目の前の人の症状を、(時に表面的に)治すことはできても、その人が本当に「生きたい」と思える、生きるちからを取り戻すお手伝いができているのか、という違和感が募っていききました。

14年、病院勤務をやめて南インドにある国際的な実験都市「オーロヴィル」に渡り、2年ほど暮らした経験が、その後の人生を大きく変えました。

16年に帰国し、福島県西会津町にホリステイックなエコビレッジ「ダーナビレッジ」を立ち上げ、以来運営しています。あわせて、農業研究者の父と無かん水有機栽培でメロンやミニトマト、お米など

を育てながら、農や教育、医療を分断させずに暮らしの中からつながりを取り戻す活動にも取り組んでいます。

世界には数千のエコビレッジがある

エコビレッジという言葉を初めて聞く方も多いと思います。世界的なネットワーク組織であるGEN（グローバル・エコビレッジ・ネットワーク）は、エコビレッジを「世界観（文化）、社会、エコロジー、経済、という四つの側面すべてにおいて、地元の人々の参加型プロセスによって意識的に設計された、意図的、あるいは、伝統的または都市的コミュニティ」と定義しています。

難しく聞こえますが、要は「便利さや効率だけを追いかけるのではなく、いのちが健やかに循環する暮らしを、住む人たち自身の手でつくり直していく場所」だと私は捉えています。

世界には数千ともいわれるエコビレッジがあり、そのあり方はじつにさまざまです。たとえば私が2年間暮らしたインドのオーロヴィルは、1968年に「Human Unity（人々の調和）の実験都市」として構想され、今では世界60カ国

以上から集まった約3000人が暮らす、人口規模も理念も大きな国際コミュニティです。都市計画そのものが精神的な理想を体现するようにデザインされ、訪れるだけでも圧倒される場所です。

そこでは、自然と調和した暮らしがあり、有機農業や植林が日常的に営まれ、薬に頼りすぎず心身の深い気づきとつながる医療（統合医療）も、「善意」を土台に、日常の仕事や役割を心をこめて行なう文化（インドでは「カルマヨガ」といいます）もありました。

暮らしを自分たちの手に取り戻す

一方、スコットランドの「フィンドホーン」は、1960年代にごく少人数の家族が荒地を耕したことからはじまったコミュニティです。パーマカルチャーやエコロジカルな建築、精神的な取り組みで世界的に知られ、GENの設立にも深く関わってきました。

同じエコビレッジでも、国際都市のように大きなものもあれば、数世帯からじわじわ育っていくものもあります。理念だけでなく規模も農業への比重も、コミュニティごとにまったく違います。唯一

の正解があるわけではなく、その土地と暮らす人たちの願いに応じて、それぞれの形が生まれていくのだと思います。

ただ、規模や形はさまざまでも、共通する点がひとつあると感じています。それは、暮らしを「誰かにお任せする」のではなく、自分たちの手に取り戻そうとしていることです。エネルギー、食べもの、子育て、医療、看取り。本来どれも暮らす人自身が主体的に関わってよいはずのものが、いつの間にか専門家や制度に預けきりになっている。その預けきり



オーロヴィル（インド）で現地の薬草料理を学ぶ筆者





毎年夏に開催するキッズキャンプで、食べられる田んぼの雑草について説明



を少しずつほどこき、顔の見える関係性に再構築する試みこそが、エコビレッジという営みの核にあるものだ、私は考えています。

ダーナビレッジは 農のあるコミュニティ

私が運営するダーナビレッジは、福島県西会津町の安座地区にある、廃校になった小学校の分校を拠点にしています。

オーロヴィルでの暮らしを経て、医療も農も子育ても分断せず、まるごと関わっていきける場所をつくりたいという願いのもと立ち上げました。

名前は、サンスクリット語で「ギフト」を意味する「ダーナ」から。「いのちが響き合う世界をつくる」ことを、活動の一番の軸に置いています。

具体的には、廃校舎を仲間や滞在者と一緒に少しずつ手を入れながら住まいとして使い、2 haほどの田んぼや畑で食べものを育てる「農のあるコミュニティ」を営んでいます。

裸足で田んぼに入ると、泥のやわらかさや水の温度、虫や鳥たちの声に、深いところで懐かしさを覚える感覚があります。

す。子供も大人も泥だらけになりながら、ただお米を育てているだけなのに、どこか自分自身もととのっていく。そんな時間の積み重ねが、ここでの暮らしの土台です。

子育てやお産も、コミュニティの中で仲間と支え合いながら行なっています。

国内外からの滞在・リトリート（日常を離れてヨガや瞑想などを行ない、心身を回復させること）の受け入れ、対話やワークショップの場づくり、ダーナファミリー制度という会員制度も用意しています。会員になると、旬の野菜やメロン、お米が届いたり、イベントに優先的に参加できたりします。

こうした取り組みが評価され、25年に「環境省グッドライフアワード」の環境大臣賞優秀賞をいただき、西会津町長へ表敬訪問もさせていただきました。今年の5月には10周年の節目をみんなでお祝いしました。

オリジナルメロン品種の 学び場もスタート

今、力を入れているのは、ダーナビレッジの営みが時代に合わせて続く形にす



ることです。私のようなファウンダー（設立者）がいなくなったら終わってしまうのではなく、次にこの場を紡いでいきたいと感じてくれる方が、自分の得意なことや興味を持ち寄りながら、少しずつ担い手になっていく。そんな「生命場^ば」としてのダーナビレッジを、これから出会う方々と一緒につくっていきたいと思っています。この文章を読んで、自分も関わってみたいと感じてくださったなら、ぜひ足を運んでください。

継承したいのは、この場だけではありません。父（小川光）が40年かけて育種したオリジナル品種のメロンは、無かん水有機栽培で「身体に美味しい農産物コンテンツ」（日本有機農業普及協会）3年連続最優秀賞という評価をいただいたきた、かけがえのないものです。そのタネと栽培技術を、これから農業を志す方やいのちを育む暮らしに関心のある方と分かち合っていきたい。そんな思いで、今年から栽培技術や考え方を伝える学びの場をスタートする予定です。

過疎集落を元気にすることに似ている

これまでの10年間を振り返って感じる

のは、エコビレッジをつくることと、過疎に悩む集落を元気にすることは、じつはとても近い営みだということです。特別な理念や大きな資金がなくても、まずは「この土地で、何ができるか、何をしたいか」から、どちらも始まります。

空き家や廃校のような使われなくなった場所は課題ではなくチャンスです。衣食住やエネルギーが不安定な現代だからこそ、地域は資源の宝庫なのです。暮らしのひとつひとつを、できるだけ自給したり、顔の見える形で手を取り合ったりしていくことが、地域を本当の意味で豊かにしていくのだと感じています。

完璧な理想郷をつくろうとするのではなく、うまくいかないことや失敗も含めて楽しめるマインドを持つこと、弱さも含めて互いに分かち合える関係性を築いていく姿勢が、何よりも大切です。エコビレッジを、遠い世界の特別な取り組みとしてではなく、それぞれの地域で「心地よいコミュニティを自分たちで創造する」ためのヒントと受け取っていただけたら嬉しいです。

私自身の歩みやダーナビレッジでの10年間の試行錯誤（うまくいったことも、

失敗したことも）について、9月に発売された『エコビレッジ 農でケアするコミュニティ』で詳しくお伝えしています。お読みいただけますと幸いです。



シリーズ農のとびら エコビレッジ ——農でケアするコミュニティ——

農的暮らしと多様な生き方が尊重される「居場所」づくりの10年間の記録。農のケア力を最大限にいかすエコビレッジの日々を紹介します。

農文協
四六判・192ページ 1980円（税込）